

此河源出于野州奈須嶽、濫觴于嶽麓瀑布、林中有老熊、年々産子、必飲瀑布而安、故稱之曰生熊瀑布、自是滾々歷于會津、白河、伊達、柴田、伊具、亘理、村、落尾山、田澤、名取、南長谷數所、過同郡荒濱而入于海、且夫奥州大河尤多、在我大守封内、北稱崎多河、南號阿福麻、此河流是也、荒濱乃商船所輻輳、設倉廩於此而納公穀、有吏而司之、河北亦商船著岸之津也、其地乃名取郡蒲崎也、河流過其兩間、而滔々朝于東濱焉、於和歌殊得其美名、

〔古今和歌集二十〕陸奥歌

阿武隈に霧立曇り明けぬ共君をばやらじまてばすべなし

〔吾妻鏡九〕文治五年七月十七日乙亥、可有御下向于奥州事、終日被經沙汰、此間可被相分三手者、所謂東海道大將軍千葉常胤、八田右衛門尉知家、各相具一族等并常陸下總國兩國勇士等、經宇大

行方廻岩城岩崎渡遇、隅河湊可參會也、八月七日甲午、泰衡日來聞二品源頼朝發向給事於阿津賀

志山築城壁固要害、國見宿與彼山之中間、俄構口五丈堀、堰入逢隈河、流柵、

〔奥の細道〕心もとなき日數かさなるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ、中とかくして

越え行くまゝに、阿武隈川をわたる、左に會津根高く、右に岩代相馬三春の庄、常陸下野の地をさ

かひて山連らなる、

〔東遊雜記二十五〕角田と云所は在町にて、仙臺侯の臣石川大和と言し大夫の在所也、中角田の

東にて阿武隈川を渡る也、名所に載せし稻葉の渡、此川下にありとばかりいふて、其實跡定かな

らず、古歌によみ人しらす、

風寒く稻葉の渡り空はれて阿武隈川に澄る月影初に記せしごとく阿武くま川は、北上川に

は大におとれり、此邊より海へ川の流れ六里也、

〔奥羽觀蹟聞老志九〕石巻海門

北上川